

近藤みゆきさんについての思い出

久保田 淳

今年の一月六日夜、渡部泰明氏からの電話で、近藤みゆきさんが旧年の暮れ近くになくなれたことを知った。渡部氏によれば、夫君近藤泰弘氏から告げられたとのことであつた。みゆきさんが長い闘病生活を続けておられたことはうかがっていたが、この知らせは余りにも突然のことと感じられ、胸のふさがる思いであつた。「令和元年十月十三日」という日付のある、みゆきさん御自身からのお手紙を読んでからさほど経っていないのにといい気持ちがあつたからである。

みゆきさんが東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程の修士課程に入学したのは一九八三年四月のことであるが、記憶をたぐると、非常勤講師として週に一輸出講していた日本女子大学の教室で、私はその二年ほど前から

ら、おぼろげながらみゆきさんを知っていたようだ。藤原定家とその時代についてはほぼ話していた私の講義を、前の方に坐つて熱心に聞いている、しかし単位として履修はしない学生だったと思う。講義の前後に立ち寄った研究室で、東大の大学院に進もうと考えている学生がいると耳にしたが、その学生かなと感じた。

その頃は本務校の他に四校で週に計五齣の講義や演習を担当していたので、混乱しないために各大学でしたことを手帳に摘記していた。一九八二年の手帳を見ると、夏休み明けの日本女子大での講義の後、正門前の喫茶店で研究生三人とおしゃべりをしたとある。その三人とは石川（旧姓筈）暁子さん、木内郁子さん、そして満田みゆきさんだった。石川さん、木内さんは、非常勤講師にも卒業論文の指

導をさせる当時の日本女子大の方針で、私が卒論の相談を受けたことのある卒業生だった。そして私はこの時、教室の前の方に坐って私の講義を聞いていた学生が王朝和歌の研究を志していることをはっきり知ったのであろう。

満田みゆきの大学院修士課程の専門科目の答案は、私の知る限りでじつにみごとなものであった。秋山虔先生が何かの折にみゆきさんについて、既に専門の研究者のようだと、私に対して述べられたことも思い出される。研究テーマは平安和歌だから、秋山先生が指導教官になって下さるものと私は思っていたが、先生は「私は一年後には退くのだから」と言われて、私にその役を命じられた。先生が一九八四年に定年退官されて鈴木日出男氏が着任した時、私は指導教官を変更するようにとみゆきさんに言ったが、提出した履修科目表の指導教官の欄には私の名が書かれてあったので、それ以上言うのをあきらめた。自身の優柔不断さをさらけ出したことになる。

八三年から翌年にかけて、大学院の私の時間では『袋草紙』を読んだ。みゆきさんは八三年には和泉式部、八四年には加賀左衛門について発表している。八五年には百人一首で紀貫之の歌、各自の研究テーマを取り上げることにした八六年には、源道済の和歌について報告した。

一九八六年はみゆきさんにとってたいそう重要な年で

あった。春には大学院修士課程を修了、博士課程に進学、秋十一月九日には国語学研究者近藤泰弘氏と新宿のホテル、センチュリー・ハイアットで華燭の典を挙げられた。その席でスピーチを求められて何を話したか、私は覚えていない。ただ、その前後の手帳を見て、その二週間ほど後に、同じく新宿の高層ビルの中の居酒屋で開かれた、大学院の和歌を研究しているメンバーのコンパに、新婚早々のみゆきさんも出席していること、源道済についての報告はその半月ほど後であったことを知って、いかにも彼女らしいと、今にして思うのである。

新進の王朝和歌研究者近藤みゆきの名は、この頃既に同学のその分野の人々に知られ始めていたのであろう、一九八八年四月には博士課程を中退、千葉大学に専任講師として着任した。私にとっても東大国文の先輩である島田良二氏が近藤さんの学才を見抜かれての人事で、「錐、囊にたまらず」という諺の通りであった。千葉大学から実践女子大学への転出の時のことはよく知らない。

年号が昭和から平成へと改元された一九八九年一月に刊行を開始した、岩波書店の新日本古典文学大系では、編集部は八代集のすべてを書目に収めることにしていた。編集委員の中で最年長だった佐竹昭広氏は、私に「新古今集をやったら」と言われたが、私は「後拾遺和歌集をやってみ

たい」と言つて、それが認められた。新古今集はそれまでに二つの出版社で校注をしたことがあるので、この時は王朝和歌の中に兆してくる中世的なものを後拾遺集あたりから探つてみたいと山氣を出していた。そして、平田喜信氏と共に、分担して本文を作り、注釈を加えたが、作者や詞書などに見える人名や地名の解説、先行注の調査などについて、数名の若手の研究者に協力してもらつた。この時作者の伝記や経歴などについて、最新の研究成果を結集してくれたのが、近藤みゆき氏と武田早苗氏（平田氏の協力者）であつた。そして新古典大系『後拾遺和歌集』は一九九四年四月に刊行できた。丁度私が定年で東大を辞し、最初に教職に就いた白百合女子大学に再就職した時であつた。

その三年後、私は明治書院を版元とする和歌文学大系全八十巻という、向う見ずな企画を発足させた。このシリーズでは勅撰二十一代集のすべてに加注することを目標の一つと定めた。その中で後拾遺集の担当は近藤みゆきと決めた。みゆきさんは喜んで下さつたと思つている。その時、病魔が忍び寄つていたのかどうか、知る由もなかった。本文は仕上げたが加注は困難であると御本人から知らされた時は愕然とした。出来上つている本文原稿を送つて頂き、注釈は新古典大系版で詞書登場人物の解説を担当された松本真奈美さんに依頼し、御両人の共著とすることをみゆき

さんに承諾して頂いた。

近年岩波書店は、完結してから大分経つた新古典大系のうちとくに主要な古典の文庫本化を進めているが、その一環として、八代集の手始めに後拾遺集の文庫版をもくろみ、その実現を私に求めた。共校者の平田氏も既に逝去され、一人で新古典大系版を見直すには余りにも年を取り過ぎてしまつたと痛感しながら、何とか文庫版『後拾遺和歌集』の刊行に漕ぎ着けたのが、昨年の九月だつた。そしてこの小文の初めに記した、みゆきさんからのお手紙とは、その文庫版をお送りしたことへの返信であつた。そこには新古典大系本の作業をした日々が懐かしく思い出されることや、病のため現在は十分に研究ができない残念さなどが書かれてあつた。

今改めてこのお手紙を読み返し、『古代後期和歌文学の研究』（二〇〇五年、風間書房）、『王朝和歌研究の方法』（二〇一五年、笠間書院）の遺著のそここを開き見て、思い合はされることは少なくない。そしてこの両書が今後の王朝和歌の研究者を永く啓発し続けることを疑わない。

近藤みゆきさんは明るくて茶目つけもある、魅力的な人だつた。今でも思い出されるのは、彼女が大学に入った年の秋、奥州平泉への国文学研究室旅行で、山中玲子さん、谷知子さんと共に、彼女が女性トリオのキャンディズよろ

しく、振りを交えてその持ち歌を歌ったことである。そしてその二十年後には、この三人と渡部泰明氏が幹事となつて、昔の院生諸氏が私の古稀の祝いと称して、新宿御苑近くの割烹で宴を開いてくれそれから歌舞伎町のカラオケ・バーに移つて、昔のキャンデイズの歌と踊りが再演されたのであった。

数年前、丁度七十代を過ぎて八十代に入った頃、何度か出たり入ったり、病院のお世話にならざるをえない病を経験してからは、私は人々の前でしゃべったり、講義のようなことをしたりすることはやめた。ただ週に一度、和歌文学大系の仕事で明治書院に通うことは続けてきた。天気が良い朝、そして気力がある時は、新宿東口から区役所通を抜けて、通称職安通に面した小さなビルの二階にあるその仕事場まで歩いて行く。その道筋、新宿区役所の少し先に、三十数年前、旧院生諸氏にくつついて行き、皆の熱唱に感嘆したカラオケ・バーのビルがある。その前を通ると、皆若かったのだなあと、その時のことなどが思い出されるのだった。

しかし、今年の三月以降は、週に一度の仕事場通いもやめざるをえない世の中になった。そして今では自宅で人々の原稿や校正刷などを読んでゐる。現在取りかかっているのは、四人の女性達と共に校注する古今和歌集の原稿整理

である。そして、いずれは近藤みゆきさんが病軀をおして作成された本文に松本真奈美さんが注釈を加えられる後拾遺和歌集も、和歌文学大系全八十巻のうちの一冊として公刊されることであろう。それがいつのことか、私がそれを見届けることが出来るかどうかはもとよりわからないけれども、今後どのように変容するか見当のつかないこの国の文化にとって、そのような古人の心を探る営為が意味のあるものであり続けることを信じたい。

近藤みゆきさんが王朝和歌文学研究の分野で残された足跡を顧みながら、そんなことを考えている。

(くばた　じゅん・東京大学名誉教授)